CREATIVE WELL-BEING TOKYO: PRACTICE JOURNAL 2020—2026



だれもが文化でつながるためのプラクティス

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー

CREATIVE WELL-BEING TOKYO: PRACTICE JOURNAL 2020—2026

だれもが文化でつながるためのプラクティス
クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー（以下、CWT）では、芸術文化を通じて人々のウェルビーイングのあり方を探る実践を続けています。文化施設へのアクセシビリティを見直すことからはじまり、多様な人々との協働や、都立文化施設各館での取り組みを重ねるなかで、「だれもが文化でつながる」とは何かを問い続けてきました。

本冊子は、その実践＝Practiceの軌跡をたどる活動記録＝Journalです。2020年からの経験を起点に、2022年のプロジェクトの始動、文化へのアクセスをひらく取り組み、そこから生まれた新たな問い、そして2026年からの「Moving Together ともに生きる文化」へ。ここに記すのは、完成された成果や一つの答えではありません。考え、実践し、検証し、また実践する。その積み重ねのなかで育まれてきた知見と問いを、写真と言葉とともに記録します。

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーのウェブサイトにて、
本冊子のPDFおよび読み上げテキストを公開しています。
下のURLまたは右の二次元コードからアクセスし、ご覧ください。
https://creativewell.rekibun.or.jp/activity-know/practicejournal.html

INDEX

ウェルビーイングを、問い続ける …… 2
アーツカウンシル東京 機構長　青柳正規

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーとは …… 4

PHASE 1 ｜ 2020–2022 …… 5
オリンピック・パラリンピックとコロナ禍

PHASE 2 ｜ 2022–2024 …… 9
文化施設へのアクセシビリティ

PHASE 3 ｜ 2024–2026 …… 13
積み重ねる経験からその先へ

COLUMN:　だれもが文化でつながる会議 テーマの変遷をたどる …… 17

PHASE 4 ｜ 2026→2030 …… 18
Moving Together ともに生きる文化

ウェルビーイングを、問い続ける

アーツカウンシル東京は、東京都での多様な芸術文化振興事業を担う機関として、2012年より活動してきました。今日、世界の都市が直面する分断や、開発による地域性の喪失、災害などといった課題を考えるとき、わたしたちは、都市において文化が果たしうる役割にあらためて目を向ける必要があると考えています。

文化には、都市の成長の陰で機能を失ったものや空間に新たな価値を与え、再活用へと導く触媒としての力があります。また、さまざまな時代の記憶が織り重なり、異なる背景をもつ人々が暮らす都市において、分断や差別を乗り越え、多様な住民をつなぐコミュニティの土台となることもできます。急激な開発によって地域の営みが破壊されるときには、変化を緩やかに受け止める時間的な余白を生み出すこともできるでしょう。

こうした文化の力を、わたしたちは東京での経験を通じて考えてきました。当機関の設立に尽力した当時の東京芸術文化評議会会長・福原義春氏は、その発足にあたり、文化を「今日の都市における重要なインフラ」として位置づけました。ヒト・モノ・カネが牽引する20世紀型社会の限界を超え、生活者の誇りや尊厳を大切にしながら、東京の価値をさらに高めていく――。その原動力を文化に見出し、社会に定着させる組織の必要性を説いたのです。この理念は、現在もわたしたちの活動の底流を貫いています。

一方で、近年の東京では、そうした「文化」のあり方そのものへの再考を迫る、二つの大きな出来事がありました。

一つは、1年の延期の末に開催された、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会です。スポーツと同時に文化の祭典でもある同大会の開催に向け、わたしたちは2016年から数多くの文化プログラムを実施してきました。昨年の東京2025デフリンピックに向けた環境整備も含め、これら国際大会の経験は、多様な人々が出会い、互いの文化を尊重し合う場をいかにつくり出せるのかという、思考と試行錯誤のレガシーをわたしたちに残しました。

もう一つの出来事は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックです。あらゆる文化活動が制限されるなか、東京では芸術文化従事者向けの支援と、人々が在宅でも文化に触れられる機会の提供を行う「アートにエールを！東京プロジェクト」を実施しました。そこでわたしたちは、東京に暮らす芸術文化関係者の総体を再認識するとともに、日頃から文化へのアクセスに困難を抱えていた方々のニーズにあらためて向き合うこととなったのです。

こうした経験から生まれ、育まれてきたのが、2022年よりはじまった「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」です。当事業では、言語や文化の違い、障害の有無など、個人を取り巻く多様な状況を踏まえ、誰もが芸術文化を楽しめる環境づくりをめざして、各文化施設でのアクセシビリティ向上や、「だれもが文化でつながる会議」の開催など、多角的な取り組みを進めています。

文化は一部のクリエイターの手だけでつくられるものではありません。それを媒介する人、そして受け取る人とのかかわりのなかでかたちづくられるものです。そして、ある属性をもつ人々が向き合う困難や不便は、時間や条件の変化に伴い、いつ誰のものにもなりえます。だからこそ、互いの違いを尊重しつつ、社会に引かれた境界線を絶えず問い直していくことが大切です。ときには人間と他の生物との区別さえも超え、あらゆる存在にひらかれた文化のあり方と、文化を通じて共有できる土台を模索していくこと。その営みは、現代の都市が分断や災害を乗り越えていくための重要な鍵になると考えています。

文化は、人々に安心や心地よさを与え、個人のウェルビーイングの向上に寄与します。しかし、そのかたちが固定化されれば、文化の停滞や新たな排除を招く余地も生まれます。「クリエイティブ・ウェルビーイング」という名称には、固定観念を打ち破り、常に新しい視点から文化とウェルビーイングを更新し続けようという、わたしたちの想いが込められています。

それは、モーリス・メーテルリンクの「青い鳥」を追い求める旅にも似ています。真に重要なのは、一つの答えに辿り着くことではなく、理想を問い続け、変革を恐れず歩み続ける、プロセスそのものにあるのです。

東京での経験が、それぞれの地域や現場で文化の可能性を考えるすべての方々にとって、一つの手がかりとなれば幸いです。そして、立場や境界を超えて、この探究の旅をともに力強く進めていけることを願っています。

アーツカウンシル東京 機構長　青柳正規

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーとは

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が取り組むプロジェクトです。「東京文化戦略2030」のもと、障害の有無や言語・文化の違いを越えて、多様な人々が芸術文化に出会い、参画し、創造できる環境づくりを進めてきました。

CWTの歩み　2020—2026 → 2030

PHASE 1　2020—2022
オリンピック・パラリンピックとコロナ禍

PHASE 2　2022—2024
文化施設へのアクセシビリティ

PHASE 3　2024—2026
積み重ねる経験からその先へ

PHASE 4　2026→2030
Moving Together ともに生きる文化

都立文化施設一覧

東京都江戸東京博物館／江戸東京たてもの園／東京都美術館／東京都庭園美術館／
東京都写真美術館／東京都現代美術館／トーキョーアーツアンドスペース／
東京都渋谷公園通りギャラリー／東京文化会館／東京芸術劇場



PHASE 1
2020—2022
オリンピック・パラリンピックとコロナ禍

東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムの実施と、同じ時期に広がったパンデミック。この二つの出来事は、芸術文化のもつ価値と、これまで文化へのアクセスに困難があった人々の存在をあらためて浮かび上がらせました。東京オリンピック・パラリンピックのレガシーと、コロナ禍で得られた学びを、都市の文化的資産としてどう育てていくか。「文化とは、誰のためのものなのか」——その問いから、CWTは動きはじめました。



「手」にまつわる行為や所作、表現に着目し、地域のさまざまな人々とともに綿花を種から育てるプロジェクト。糸を用いた作品を手がけるアーティストの五十嵐靖晃が、織物活動をするクラフト工房 La Manoで実施した
手のプロジェクト（2018） 撮影：冨田了平

TURN
TURN LAND プログラム

「TURN」(2015−2021) は東京オリンピック・パラリンピックのリーディングプロジェクトとしてはじまった文化プログラムです。障害のある人、福祉施設や特別支援学校に通う人、そしてその場所を訪れるアーティスト。普段出会うことのない者同士が、ともに過ごす時間のなかから表現が生まれる場と時間をつくり出してきました。互いの違いにふれながら、その人ならではの表現があらわれてきます。そこに至るプロセスそのものに、TURNの核があります。2022年度以降は「TURN LANDプログラム」(2022−) として、これまでの経験をもとに、福祉施設とその利用者やアーティストとともに日常のなかに新たな文化活動をつくり続けています。

PHASE 1　2020—2022



リオデジャネイロオリンピック会期中に開催した「TURN in BRAZIL」。展覧会場となった、リオデジャネイロを代表する歴史的建造物「パソ・インペリアル」の外壁の窓を飾った「きりこ」は、東京とサンパウロの福祉施設で利用者とともに制作した
TURN in BRAZIL（2016）
撮影：RAFAEL SALVADOR



「パソ・インペリアル」での展示の様子。サンパウロの自閉症児療育施設で染められた糸を使い、中央の角台を囲んだ来場者が巨大な「組紐」を編み進めている
TURN in BRAZIL（2016） 撮影：RAFAEL SALVADOR



「聴こえないこと」をテーマにした、アーティストの富塚絵美の作品《光の広場》。ドラァグクイーンのマダム ボンジュール・ジャンジが午後3時の時報を告げている。福祉施設への滞在からはじまったTURNが、市中に生きる障害のある人々へとまなざしを広げるきっかけとなった
TURN フェス3（2017） 撮影：伊藤友二



「第7回 TURNミーティング」のクロストーク。「ろう文化」に対して、聴者の登壇者は「聴文化」をどのように感じているかという問いから議論がはじまった。登壇者（左から）：牧原依里、ロバート キャンベル、日比野克彦、渡辺祐
第7回 TURN ミーティング（2019） 撮影：冨田了平、鈴木竜一朗

TURN LANDプログラムにかかわる施設・団体の職員をはじめ、アーティストやコーディネーター、地域の協力者などが集い、それぞれの活動を報告・共有するミーティングを定期的に開催。活動の実践知や経験を共有する場をひらいている
TURN LAND ミーティング（2022） 撮影：梅田彩華





障害者施設の利用者とアーティストのきむらとしろうじんじんが、地域の人々と協働する場を路上にひらく「野点」の風景
TURN LANDプログラム 浅草みらいど（2024） 撮影：梅田彩華



路上生活経験者とダンサーのアオキ裕キによるダンスグループ「新人Hソケリッサ!」の心身障害者福祉ホームでの交流
TURN LAND プログラム さくらんぼ（2023） 撮影：梅田彩華



施設利用者とアーティストの伊勢克也が、TURN LANDプログラムで制作した編み物作品を「だれもが文化でつながる国際会議2024」で展示し、交流する様子
TURN LAND プログラム
西荻ふれあいの家（2024） 撮影：梅田彩華



アーティストのSKANKが高齢者在宅サービスセンターの利用者との交流を通して、言葉を並べ替えるだけで歌が出来上がるカードを制作
TURN LAND プログラム　西荻ふれあいの家（2025） 撮影：梅田彩華

PHASE 2
2022—2024

文化施設へのアクセシビリティ

すべての人がアートと文化に
出会うためのポータルサイトです。

プロジェクトについて →

アクセシビリティ対応のあるイベントを探す ›

取組事例を知る ›

都立文化施設ガ

サポ

援・ ›

鑑賞・参画サポ

だれもが文化で

だれもが文化で
つながる会議 ›

CWTが動きはじめる2022年。だれもが芸術文化に触れられる都市をめざすために、文化施設等へのアクセシビリティを見直すことに着手しました。また、その後のCWTのさまざまな契機となる「だれもが文化でつながる会議」の開催により、国内外のネットワークが構築されました。アーツカウンシル東京に社会共生担当が配置されるなど、体制が整えられたのもこの頃です。



リニューアルを重ねてきたポータルサイトの現行版（2025年3月公開）。多様な障害特性のある会員で構成される「サニーバンク」との検証を経て、ウェブサイトのあり方から再構築した
https://creativewell.rekibun.or.jp/

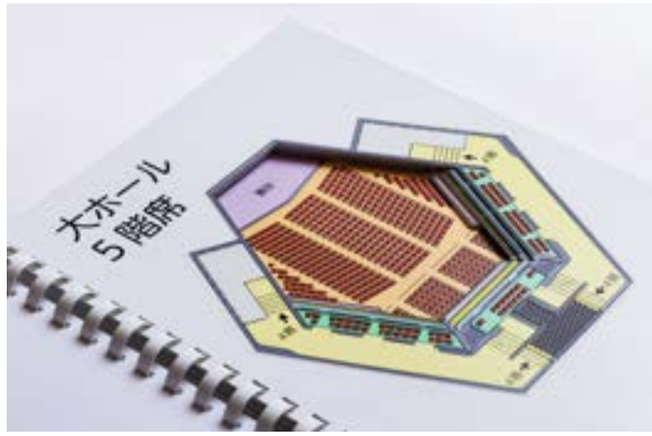
「だれもが文化でつながる」を考える

2022年、CWTが本格的に動き出します。まずは「だれもが文化でつながる」とはどういうことかを具体的に考えました。そのプロセスを障害のある人々とともにすることで、文化へのアクセシビリティを「情報を受け取れる」「鑑賞・参加できる」「参画できる」という三つの段階で捉え直す。催しの情報がそもそも届いているか。作品や舞台との出会い方はどうか。そして、つくる側・伝える側に立つことができているか。一つの正解ではなく、個別のケースに最適な対応が求められることに気づかされました。それゆえに、デバイスやツールを導入しただけでは環境を整備したことにはなりません。さまざまな障害特性のニーズにどう応えるのか――手さぐりの実践がここからはじまりました。

また、この時期の社会的な動向として、障害者差別解消法の改正により民間事業者にも合理的配慮が義務化、東京都手話言語条例（2022年）の制定、東京2025デフリンピックの開催が決定するなど、複数の契機が重なりました。

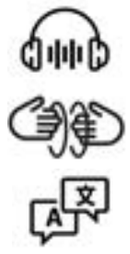
必要な情報を届けるために

来館するまでのプロセスにあるアクセシビリティ上の課題に向き合い、多様な受け取り手を想定した情報提供のかたちを探りました。都立文化施設のアクセシビリティ情報をポータルサイトへ掲載、ウェブアクセシビリティの抜本的な見直し、やさしい日本語での施設案内、手話動画での展覧会案内、視覚的にわかりやすい資料づくりなど。自分の「あたりまえ」が、別の誰かの障壁になることもある――その事実に目を向けることが出発点でした。



多層階にわたる東京文化会館大ホールの構造が触ってわかる「点字・触知図ガイドブック」





ポータルサイトのイベント検索画面。アクセシビリティに関するピクトグラムが並び、イベントにどのようなアクセシビリティ対応があるのかが一目でわかるようになっている。これまでの知見の蓄積である



ろうの手話表現者による施設利用ガイドの動画「手話による案内」。東京都現代美術館が2020年4月に公開したことを皮切りに、同様の取り組みが各館にも展開された

だれもが文化でつながる国際会議2022

CWTの最初の一歩となったのが、2022年の国際会議です。多様な価値観と包摂的な環境の推進を掲げ、アジアで初めての総合的な国際会議を開催。国内外から実践者や研究者が集まり、会議に加え、展示やパフォーマンス、ネットワーキングを実施しました。ダイバーシティ＆インクルージョンをめざす東京において、芸術文化はどのような役割を担うのかが議論されました。



「だれもが文化でつながる国際会議2022」開会式



上野恩賜公園竹の台広場（噴水広場）を会場に、観客と一緒につくり上げる「東京のはら表現部」のパフォーマンスが国際会議2022のオープニングを飾った



障害や文化、言語、考え方等が異なる人々が協働し、芸術文化の新しい楽しみ方を追求したワークショップ「共鳴する身体」。国際会議に先立つ短期集中キャンプのプログラムの一つとして実施された　撮影：佐藤基



ロンドン市副市長（文化・クリエイティブ産業担当）のジャスティーン・サイモンズが「複雑で変化し続ける世界において、文化はどうあるべきか？」をテーマに基調講演を行った

PHASE 3
2024—2026

積み重ねる経験からその先へ

都立文化施設全館に社会共生担当が配置され、CWT事務局（アーツカウンシル東京）と各館の取り組みがよりいっそう連動し、力強く展開しはじめます。月に一度の社会共生担当者会では、知見の共有や勉強会を行っています。



東京芸術劇場の敷地内に設けられた補助犬用トイレの前にて。屋根の下にあり、雨をしのげる 撮影：池田晶紀

鑑賞と参画のサポート

「情報提供」「鑑賞・参加」「参画」という枠組みは、都立文化施設全館に社会共生担当が広く配置されたことで日々の実践へと移っていきました。展示や公演を鑑賞するためのサポートを整えるだけでなく、来場した人がつくる側・伝える側としてかかわる機会をどうつくるか。施設ごとに状況も来場者も異なるなかで、共通の理念をそれぞれの現場でどう読み替えていくかが問われます。字幕機の設置、触れて味わう鑑賞、手話通訳の対応力――具体的な工夫の一つひとつが、現場での判断を支える経験として蓄えられていきました。



「芸術文化分野の手話通訳研修プログラム」では、芸術文化の分野で活躍するろう者を講師に招き、通訳技術に加え、文化事業の現場に求められる手話通訳としての倫理を学ぶ

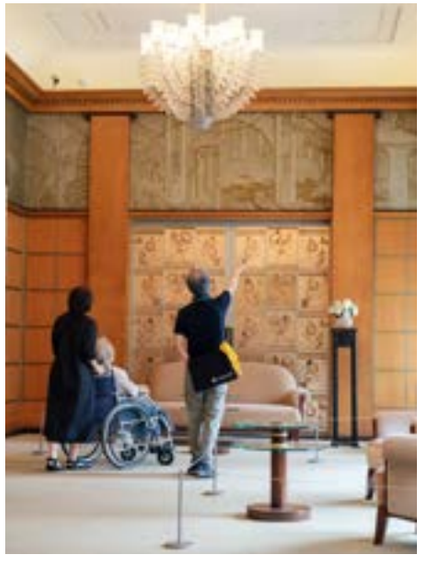


視覚支援機器を導入することで、視覚に障害のある方もバックステージツアーや鑑賞を楽しむことができる
撮影：池田晶紀

PHASE 3　2024—2026

東京芸術劇場コンサートホールのシンボルであるパイプオルガンの触察用の模型 撮影：池田晶紀





東京都庭園美術館では、入場者数を制限し、ゆとりある環境で鑑賞できる「フラットデー」を実施。歴史的・文化的価値のある建造物におけるアクセシビリティに関する取り組み
撮影：大倉英揮（黒目写真館）

デフリンピック文化事業とのかかわり

東京2025デフリンピックが開催され、79の国と地域が参加しました。その文化プログラムとして、二つの舞台作品を上演しました。ろう者と聴者が遭遇する舞台作品『黙るな 動け 呼吸しろ』を創作し、これまで積み重ねてきた知見を実践の場でいかすことになりました。音を前提としない協働のあり方や鑑賞のかたちをあらためて考え直すこと。ろう者と聴者の協働は、CWTがめざしたい社会のありようを、もっとも具体的なかたちでわたしたちに問いかけました。 そして、舞台『TRAIN TRAIN TRAIN』では、東京2020パラリンピック開会式のメンバーが集い、障害の有無にかかわらず多様な個性をもつキャストが、そのレガシーを受け継いだ舞台作品を上演しました。



ろう者と聴者が遭遇する舞台作品
『黙るな 動け 呼吸しろ』(2025)｜東京文化会館
撮影：加藤甫、川島彩水



舞台『TRAIN TRAIN TRAIN』(2025)｜東京芸術劇場
撮影：宮川舞子





芸術文化へのアクセシビリティ ヒントBOX

文化施設・文化事業におけるアクセシビリティについて考え、話すためのツールとして、カードを制作（2025） 撮影：高岡弘



在住外国人の割合が高まる東京。海外にルーツがある多様な人々が、異文化間の対話から演劇を創作するプロジェクトの成果発表でのワンシーン
Tokyo Borderless Theatre Project（2025）| 東京芸術劇場 撮影：木村雅章



手話で作品鑑賞をナビゲートする人材の養成をめざすプログラム
ろうナビゲーター養成プログラム（2025）
撮影：齋藤彰英、佐藤えりか

取り組みの成果

CWTは都立文化施設の各館や多様なパートナー（当事者・研究者・専門家など）と連携し、次に取り組むべき課題の発見とその検証を担ってきました。それらの実践を通して、それぞれの現場が自分たちの状況にあわせて使いながら育てていくツールや映像、冊子をまとめ、文化施設での活用やウェブサイトでの発信をしてきました。アクセシビリティを考えるヒントとなるカードもこうした取り組みの成果の一つです。





（上）東京国際フォーラム 撮影：加藤甫
（下）自由学園明日館

COLUMN:

だれもが文化でつながる会議
テーマの変遷をたどる｜2023–2026

2023年夏、東京都美術館でひらかれた「だれもが文化でつながるサマーセッション2023」は、2022年の国際会議で生まれた知見とつながりを国内の現場へ展開しました。テーマは「アクセシビリティと共創」。触れる鑑賞、ろう者の表現、情報保障とテクノロジー、デフリンピックに向けた展望――8つのトークセッションは、それぞれの現場で重ねられてきた実践を持ち寄る場となりました。締めくくりに交わされたのは、「ともに創るとは何か」という問いです。わからなさを怖がるのではなく、おもしろがることにこそ、共創の種があるのではないか。クリエイティブ・ウェルビーイングをめぐる問いはここから、次の段階へと踏み出します。

2024年秋、東京国際フォーラムに国内外のさまざまな分野の人々が集った国際会議のテーマは、「文化と居場所」。孤立や疎外を感じる人が増えるなかで、文化がもたらす「安心できる居場所」を、ウェルビーイングのひとつのあり方として示そうとする試みでした。「わかり合えない」ことを分かち合うこと。心地よい答えだけでなく、こうした複雑さにもよりいっそう目を向けていくことになります。

そして2025年秋。舞台は、池袋の自由学園明日館へと移ります。テーマは「居場所とわたし」。個人の自立を重視する自由学園の理念とも共鳴し、芸術文化を一人ひとりのスケールに引き寄せて考える場となりました。対話を重ねるうちに、焦点は「居場所」から「わたし」という主体へ、さらにその向こうにいる「他者」へと移っていきます。クロージングセッションに掲げられたテーマは、「わたしの居場所――未来のあたりまえを考える」。居場所とは、自らつくり続けるものであり、そのようにして未来のあたりまえに誰もがかかわることができることを再確認しました。

方法から場のあり方へ。場のあり方から、わたしという主体とその可能性へ。この3年間で、会議のテーマをより身近なところへと深めてきました。2026年の国際会議では、この流れを受けた一つの総括として、「Moving Together ともに生きる文化」をテーマに、あらためて「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」の再定義を世界への提言として試みます。

PHASE 4
2026 → 2030

Moving Together ともに生きる文化

芸術文化へのアクセスをひらくことからはじまったCWTは、さまざまな人と出会い、取り組みを重ねるなかで、「だれもが文化でつながる」ために何ができるのかを問い続けてきました。2026年の国際会議で交わされる言葉や想起されるイメージ、そして会場で生まれる新たな出会いを、これからの現場へと手渡し、この実践と学びの循環を未来につなげていきます。
芸術文化を通して、「わたし」と社会との関係を問い直し、新たな関係を見出していく。ともに考え、ともに動くそのプロセスのなかにこそ、クリエイティブ・ウェルビーイングがあります。東京都が2030年を目途にめざす「共生社会の実現」に向けて、ともに生きる文化のあり方を探り続けます。

CREATIVE WELL-BEING TOKYO: PRACTICE JOURNAL 2020 — 2026

だれもが文化でつながるためのプラクティス
クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー

企画・制作：駒井由理子、坂本有理、岡崎未侑、川満ニキアン（アーツカウンシル東京）
森 司（だれもが文化でつながる国際会議2026ディレクター）
編集：渡辺龍彦（Ballen）
執筆：杉原環樹（pp. 2–3）
デザイン：樋口舞子
印刷：株式会社山田写真製版所

発行：2026年10月28日
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073　東京都千代田区九段北4-1-28　九段ファーストプレイス5階
Tel：03-6256-8435

©アーツカウンシル東京
＊営利・非営利問わず、本書のコンテンツを許可なく複製・転用・販売するなどの二次利用を禁じます。

表紙：TURN LANDプログラム「翔和学園」の交流のなかで生まれたドローイングから



TOKYO
METROPOLITAN
GOVERNMENT

ARTS COUNCIL TOKYO

Creative
Well-being
Tokyo

Open Access to Culture Project